福島潟にさまよう亡霊をしずめる　水死亡霊塔

■福島潟で水難事故多発！

その昔、潟端に住む人々の多くは漁やヒシ採りをはじめ、対岸にある豊浦地区（新発田市）や笹神地区（阿賀野市）などへ行く時に、小舟を使っていました。現在よりもずっと大きく、遮るもののない吹きさらしの福島潟では、突風などが吹くと小舟が転覆し、水死する者も多かったといわれています。

常に水難の危険にさらされていた当時の人々は、「龍雲寺の僧と伴の者が13人おぼれ死んだ」とか「天候の悪い夕方などには、おぼれ死んだ者の亡霊が舟ばたを押さえて沈めようとする」、「髪の毛三本動いたら、潟をわたるな」などの言い伝えをとおして、その危険を後世の人びとに語り伝えてきました。

■石塔を建てて祈った！

こうした言い伝えや水難の事実が重なり合って、人々の恐怖が高まりました。そのため、福島潟で水死した人々の供養と水上交通の安全を願って、1843（天保14）年6月に水死亡霊塔が建てられました。

建立したのは、葛塚の龍雲寺11代和尚 秀外天明です。秀外天明和尚は天保年間の葛塚の「村」と「町」の争いのときに仲介役を努め、葛塚を分裂の危機から救った人物です（56ページ参照）。

水死亡霊塔は、ビュー福島潟の少し先、豊浦方面に向かう道路（県道 豊栄～天王線）の脇に立っています。この道路はかつて「浜茄子新道」と呼ばれた堤防で、1817（文化14）年に福島潟を開発するために築かれたものです。この堤ができたことにより、北の小潟（黒山潟）と南の大潟（福島潟）に分けられました。

また、対岸の豊浦地区・笹神地区にもそれぞれ水死亡霊塔があるといわれています。

今では四季をとおして美しい景色が広がる福島潟ですが、水死亡霊塔は昔ここで悲しい出来事があったことを今に伝えてくれています。

『北区お宝ものがたり』は、博物館などで1冊800円で頒布しています。